

東北文化学園大学「英語 I」(1年生)授業実践報告

半田, 幸子
ノースアジア大学法学部 : 講師

<https://hdl.handle.net/2324/4822589>

出版情報 : オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.88-88, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業は、前期開講必修科目、100 分間の授業であり、英語の総合的な運用能力を育成することが目的として行われた。複数のクラスを担当し、習熟度に合わせて分量や授業の進行速度に差をつけた。

授業の形式は、大学から提示された選択肢から、主に Google Classroom(以下、Classroom)および Google Meet(以下、Meet)を使用した。初回授業の課題の一つとして、通信及びデバイス環境の調査を行い、回答結果から、Meet での授業も実施可能であると判断した。語学の授業では、通信環境が許す限り、双方向かつ音声を用いるのが最善であろうと考え、Meet の使用を主軸とし、通信等の不具合により授業に参加できなかった受講生には別途フォローすることとした。

第 2 回から Meet にてライブ授業を行った。受講生はビデオとマイクをオフにし、筆者はマイクのみをオンにして、共有機能で適宜資料を提示し、音声のみかつアクティブラーニングを取り入れた授業である。出欠は、Classroom 上で指定した時間内に学籍番号と名前を書かせるとともに、作業の様子および課題提出でも確認を行った。

授業内容は、従来から対面で行っているもので、映画を題材に、取り上げた場面のセリフの部分聞き取りや和訳を行うものである。本授業では『バック・トゥ・ザ・フューチャー』を取り上げ、事前の映画鑑賞と、その感想および授業で扱う場面の要望の提出を求めた。受講生の要望も反映させながら、表現や難易度を踏まえて 30 秒から 1 分半程度の場面を選び、各回 1 場面を取り上げた。各場面の字幕なし版、英語字幕版、日本語字幕版と 3 種類の動画を作成し、YouTube に限定公開した。また、場面毎に作業用紙 2 種類(聞き取りおよび読解)を作成した。

授業開始当初は、オンライン授業に慣れるため読解に専念し、その後、適宜リスニング作業も追加した。通信量に配慮して、作業中は Meet を退出して構わないものとした。その間、筆者は Classroom 上の受講生

の作業画面を巡回し、作業終了後に解説を加え、最後に、日本語字幕の動画 URL を配布した。

初回は一方向の解説のみにとどめ、慣れてから受講生を指名し音声やチャットの機能を用いての発表を指示し、双方向の授業を展開した。課題は毎回、授業で得た知識を問う簡単なクイズ 1 問と、学びの振り返り(学んだことや不明点等)について短文を書くよう求めた。質問は、授業後に音声機能、チャット機能、課題を通して受け付けた。不具合時のフォローは、当初、Classroom での資料提示のみを考えていたが、丁寧なフォローの必要性を感じ、授業時間後に別途時間を設け、個別に対応した。

成績評価の方法は、出席を含む授業への取り組み 30%、課題への取り組み 30%、小テスト 20%、期末試験 20%とした。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

受講生の反応は概ね良好であった。新しい同級生とも出会えず孤独と不安を抱えた新入生にとって、教員や他の受講生の声を聞くことが安心感と連帯感につながるようであった。また、YouTube での動画確認は、自分のペースで行えることが大きな利点であることが分かり、対面授業が再開した後でも、時間外の予習復習として活用できるように思われた。

一方、学習意欲の低い受講生に対するフォローは大きな課題である。作業画面での確認と指名したときの反応、課題提出の有無や内容から判断するしかなく、脱落していても気づき難い。対面授業時との差は歴然としており、難題である。さらに、期末試験の実施形態にも課題が残る。分量と内容を吟味して問題を作成すれば、時間制限のある期末試験の方がむしろある程度公正に能力を測ることが可能ではないかと考え実施し、幸いにして今回大きな問題は見られなかったが、期末試験の実施方法や問題作成には検討の余地がある。